

「喜びの歌」

「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」 1ペテロ 1-8

本当にそうだなあ、と思う。神様もイエス様も、この目で見ただけではないけれど、でも慕わしくてしょうがないし、今見なくても信じている。そして、「かみさま」「いえすさま」と心に思い、呼びかけるとき、この世にはない喜びが満ちてきて、私たちはみんな、こんな神様の愛に包まれてるんだってわかってくる。

この気持ちを詩人が歌うと「胸は開きたり 花のごとくに」って、美しい表現になるんだなあ、新聖歌22番の歌詞を思った。

御神の愛をば 歌うわれらの

胸は開きたり 花のごとくに

御顔の光に 迷いの霧も

疑いの雲も 消えて跡なし

この曲は、ベートーベンの第九4楽章「歓喜の歌」のメロディーだからすぐに歌える。くり返し歌っていると、こんな喜びに満たされる秘訣はただ一つ、福音書に記されたイエス様を思うこと。

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である。」 2テモテ 2:8

福音の喜びって、決して難しいことではない。何とも複雑で入り組んだ自分の心をどうにかすることもなければ、移ろいやすい人の心をあれこれ詮索することでもない。全人類の中でただお一人、罪なきイエス様を思うこと。心は見つめているものに似てくるから、イエス様をじっと見つめていると、心を暗くしている迷いや疑いもいつしか消えて、喜びが満ちてくるのはごく自然なこと。

み使い聖徒ら 歌え*みいつを (*威厳のこと)

月 星 太陽 たたえよ神を

雪降る高嶺も 花咲く谷も

林も野原も 砂漠も海も

月も星も太陽も、山も谷も砂漠も海も、春も夏も朝も夕も、みんな神様をたたえている。神様の愛を歌っている。この6月、たんぼ道を歩けばカエルの声、清流を訪ねれ

ば飛び交うホタルの光、庭先にはホタルブクロの白い花、緑の風に、耳を澄ませば可愛らしい小鳥の声。みんなみんな神様をたたえ、その愛を歌っている。人の罪ゆえに地は汚染され、やがて破壊と悲惨に至るとしても、それらを超えて導いて行かれる神様を信じるかのごとく、神様をたたえ、その愛を歌い続けている。

私たちも現実の暗い問題を知らぬ訳ではない。どの問題も、どうしようもないと放り出すのではなく、できることは精いっぱいなさねばならない。でも、だからといって神様をたたえ、その愛を歌うことを止めることはできない。神様はもっと大きく素晴らしいことを、滅び行く私たちのためになしてくださったのだから。

御神は罪ある者をも愛し

み子なるイエスをば 遣わしませり

赦しの御恵み きよむる力

筆にも声にも のべ尽くしえず

そして、最後の4番を歌うと、その喜びは絶好調になった。

御神はわれらの 父親なれば

御子なるイエスをば 「兄上」と呼ばん

世人よ親しみ 互いに助け

御旨の成る日を 忍び待てかし

イエス様は「あなたがたをみなしごにはしておかない」ヨハネ 14:18 と言われた。

ご自身のお話に聞き入る人たちを見回し、

「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」マルコ 3:34-35 と言われた。

イエス様を慕い求め集まる人は、みんなみんな神の家族。親のない子も、子のない人も、この世では天涯孤独のさみしい人も、みんなみんな神の家族の一員で、父なる神様の家に住み、イエス様が私たち弟や妹のために身を粉にして守ってくださるお兄様。そんな御国の完成を待ち望みつつ、今すでに、この世にあって神様を「お父さま」と呼べる幸いを思えば、寂しさなんて吹っ飛んで、不思議なほど温かい思いがあふれてくるのだから、神様の御力ってやっぱり素晴らしい。

主の慈しみは決して絶えない。

主の憐れみは決して尽きない。

それは朝ごとに新たになる。

あなたの真実はそれほど深い。哀歌 3:22～23

第一日曜の礼拝で読み続けた「エレミヤ書」を終えて、6月から「哀歌」に入った。

2011年7月から3年間、エレミヤ書を読む度に、イスラエルの罪にわが罪を見せられる思いがして、だからこそ読み続けねばと、感話の度にみんなで話し合った。

しかし、それにしてもと思う。この小さな取るに足りない集会で、こうして聖書を読むことを中心に置いて礼拝が続くのは、主の慈しみと憐れみによるとしか考えられない。そうだった。私たちは力のなさや、危うさを嘆かなくてもいいのだ。私たちは強さや立派さゆえに神様を求めるのではない。弱いからこそ、すぐにもかき消されてしまいそうな危うい者だからこそ、神様を求める。神様のもとに立ち帰るより他に生きるすべのない者たちだからこそ、小さな者に御目を留めてくださる主の慈しみと憐れみによって、毎週の礼拝が与えられるのだと、今心底思う。

「哀歌」を読みはじめて、「エレミヤ書」を読んできたからこそ、少しでも身にしみて分かると話し合った。エレミヤ書を読む時にも、先に「列王記上下」を学んで少しでも歴史が分かったからこそ、エレミヤ書を身近に思えると話し合った。このように、少しずつ、少しずつ聖書の世界が開かれていく喜びははかり知れない。

「主の御前に出て 水のようにあなたの心を注ぎ出せ。」哀歌 2:19

ああ、日々このように悔い改めて、どこまでもあなたの道を歩ませてください、主よ。